

有島武郎の「奇跡の咀」試論

—その作意と構想をめぐって—

奥村裕次*

— 차례 —

- 1.はじめに
- 2.「奇跡の咀」の構想と人物設定
- 3.「奇跡の咀」創作とロシア革命
- 4.おわりに

〔日文抄録〕

有島武郎は、1917年(大正6年)10月に「奇跡の咀」という戯曲を書いている。1917年は有島が作家として頭角を現した年であり、名のある作品を続けざまに発表している。その中であって「奇跡の咀」は一定の評価を受けた作品ではなく、従って今まで注目される作品ではなかった。しかし、「クラゝの出家」の直後に書かれた小説で、共にサバティエの『アッシジの聖フランチェスコ』の一節が創作のモチーフとしている点、またロシア革命の真っ只中で書かれている点において研究の対象となり得ると考えた。

* 慶南大学校 日語教育科 助教授. wakuwaku78@hotmail.com

この品は4人の登場人物を通して、キリスト教信仰の否定的な部分を描き、キリスト教を批判する内容となっている。ただ、有島の作品は「リアルな世界」と「象徴化された世界」という二重構造になっている場合が多く、この作品も表面的に表れた意味世界とは別に、象徴化された世界が存在していることが予測される。「奇跡の咀」が書かれたのはロシア革命の直後であり、ロシア革命に関心の高かった有島は、自らの考えを暗示的に描いて見せた。即ち、「聖像の下山」をロシア革命、二人の障害者をブルジョア階級、甲・乙(一般市民)をプロレタリア階級に喩えた構図となっている。新しい時代の到来を希望と不安の中で迎えていた有島は、それを戯曲で表現しようとした。

主題語:キリスト教, 聖フランチェスコ, サバティエ, ロシア革命, 唯物史観

1. はじめに

「奇跡の咀」は、1917年(大正6年)10月発行の『東方時論』に掲載された短編小説である¹⁾。1917年という年は、有島が作家として頭角を現した時期であり、「死と其前後」「カインの末裔」「平凡人の手紙」「実験室」「クラ、の出家」など、数多くの名のある作品を発表している。有島にとってはまさに創作意欲が一番旺盛だった時期と言えよう。そんな中であって「奇跡の咀」は、さほど注目された作品ではなく、同時代の評論家もこの作品についてほとんど言及していない。また現在に至るまで、有島研究者もこの作品を

1) 有島は(九月二十日)の日記に「今朝、東方時論社へ「奇跡ノ咀」の原稿を送る。墓へ行き、それから漫画展覧会を見に三越へ行く。午後、少し昼寝。」と書いている。
有島武郎、「観想録」、『有島武郎全集』第十二巻、筑摩書房、日本、1982、p.558

研究の対象としてこなかった²⁾しかし、今回もう一度読み返してみて、ある点に興味を引かれた。それは「クラ、の出家」の創作の直後に発表されているという点、即ちキリスト教との関連性についてであり、更には1917年の3月にロシア革命が勃発し、革命が進行中だったという時代的な背景があるという点である。「奇跡の咀」は作品としては十分な仕上がりとは言えないかもしれないが、作品に込められた作者の意図や意欲というのは十分に汲み取ることができるように思う³⁾ロシア革命が勃発した時期と期を一にする「凱旋」「動かぬ時計」「『死』を畏れぬ男」と共に、「奇跡の咀」は有島独自の社会批判が暗示されていると考えられる。

また、有島は創作にあたって常に意識していたのは、その思想性であった。有島は自らの作品について「作物中の人物の持つ思想が現在の生活にどれ程緊迫切實な関係を有つてあるかないかゞ私としては第一の問題です⁴⁾」と書いているように、絶えず自らの思想を作品化するよう努めていた。従って、本稿では作品創作の背景と時代性、表現の意図などを深く掘り下げながら検討し、今まで見過ごされて来た暗示的な描写の意味を明確にしていこうと思う。そうすることで、この作品の再評価が可能になると考えるからである。

2. 「奇跡の咀」の構想と人物設定

2.1. 「クラ、の出家」との関連性

2) 管見では「奇跡の咀」に対する解説はあるが、論文は見当たらなかった。「奇跡の咀」を改稿し童話として発表した「片輪者」については、片岡良一、増子正一などの論文が出ている。増子正一、「片輪者の原点」、『有島武郎研究』、信教出版社、日本、1994

3) 有島は晩年の1922年1月に「片輪者」という題で、同様の内容を童話として書き直して発表している。このことからしても、この作品に対する有島の愛着が伺われる。

4) 有島武郎、「予に對する公開狀の答」、『有島武郎全集』第七巻、筑摩書房、1980、日本、p.246

「奇跡の咀」はポール・サバティエの『アッシジの聖フランチェスコ』の一節が創作のモチーフとなっていることが知られている⁵⁾。有島がフランチェスコを初めて知ったのは1903年(明治36年)の1月4日で、内村鑑三に借りた『フランシス聖者伝』を読んだのがきっかけであった。有島はその時の感動を『観想録』に書き留めている⁶⁾。その後「聖フランシスの『完全の鏡』序」に「学校にゐる時に私は内村先生に勧められて、サバティエのフランシス聖者傳を讀んで以來、私はこの聖者に對して心から尊敬を持つやうになりました。」⁷⁾と書き、フランチェスコ⁸⁾に強い感化を受けたこと、またその後も敬愛の念を持ち続けていたことが伺われる⁹⁾。周知のように、有島は罪の問題に悩み、葛藤の末に背教者となってキリスト教を捨てた身だった。しかし、キリスト教を完全に捨てたわけではなかった。完全な棄教者であるとすれば、教会脱会後、無関心であるか、または反キリスト教で一貫していたはずである。だが、離教後の有島の歩みを見ると、キリスト教に関連した作品をいくつも書いており、潜在的な信仰を持ち続けて

5)「ポール・サバティエの『アッシジの聖フランチェスコ』の一節を創作の契機とした」、有島武郎研究会、『有島武郎辞典』、勉誠出版、2010、日本、p.96

6)「朝内村氏ヨリ借來レル "Life of St. Francis of Assisi" by Paul Sabatier ヲ讀ミヌ。彼ハ十三世紀ノ始メアリシ人ニシテ、Danteガ文藝復興期ニ於テ伊太利ノ思想即チ歐州ノ思想ヲ代表セシガ如ク St. Francisモ亦十三世紀ナル時代ノ代表者ナリ。彼ノ宗教ヲ取ラントシテヨリ之レニ服スルニ至リシ迄ノ經歷ハ實ニ弱キモノ餘ノ如キヲ鞭ツ事多シ。」(1903.1.4.)

「午後家ニアリテ "Life of St. Francis" ノ "Struggle and Triumph" ヲ讀ム。肉躍リ骨動ク。我モ Francis ト共ニ emotion ニヨリテ震エヌ。彼ガ赤裸々トナリテ其衣ト其金トヲ法官ニ提出シ、ト云ヒシノ意氣ニ讀ミ至リテハ感激ノ涙息胸ニ通ル。」(1903.1.6)

有島武郎、「観想録」、『有島武郎全集』第十卷、筑摩書房、1981、日本、p.233

7) 有島武郎、「聖フランシスの『完全の鏡』序」、『有島武郎全集』第七卷、筑摩書房、1980、日本、p.385

8) フランチェスコを有島はフランシスと書いているが、二人は同一人物なので、以後はフランチェスコと表記することにする。

9)「私が欧州にあわだぐしい半年程の旅をした時、是非とも遭ひたいと思つた人はクロボトキン、是非とも訪れたいと思つた土地はアッシジでした。」とし、欧州旅行の目的の一つにフランチェスコゆかりの地「アッシジ訪問」をあげていることから分かる。前掲書、p.385

いたことは否めない。

有島は竹崎八十雄宛の書簡の中で「私は基督教會からは離れましたが基督を離れたとは思ひません。いくら離れやうとしたつてその圏外に出るには基督は大き過ぎるつを感じてゐます。」¹⁰⁾と書いている。この言葉は、示唆するところが大きい。キリスト自身への信頼は変わらないものの、キリスト教會に対してはその腐敗と偽善的姿に失望し、いたって否定的であった。したがって、作家として歩み出した後も、この肯定と否定の間を行ったり来たりしているのである。

『フランシス聖者伝』を読み、その時の感動を作品化したのが、1917年(大正6年)9月、雑誌『太陽』の第二十三卷第十号紙上に掲載された「クラ、の出家」であった。フランチェスコに恋するクララを主人公に、彼女が出家するまでの神聖な恋と信仰をテーマに、みごとに描いてみせた。彼の作品は、総じて人間の純粋な面と邪悪な面とが対極を成し、作品ごとに対照的に描かれていることがわかる。例えば『宣言』で純真な愛を描いた後、それとは対照的に嫉妬から破滅を迎える『石にひさがれた雑草』のような作品を描いている。『石にひさがれた雑草』のモチーフについて、有島はこう語っている。

而して『宣言』を書いた時の心持ちをもう一度裏返して自分に迫らなければならぬ必要を感じた。愛が正當に取扱われた場合と不正當に取扱われた場合とから来る恐ろしい隔たりを見窮めて見ようとした。¹¹⁾

「『宣言』を書いた時の心持ちをもう一度裏返して自分に迫らなければならぬ必要を感じ、それをモチーフに『石にひさがれた雑草』を書いたこ

10) 有島武郎、「竹崎八十雄宛(1920年3月11日)」、『有島武郎全集』第十四卷、筑摩書房、日本、1985、p.169

11) 有島武郎、「『生れ出る悩み』廣告文」、『有島武郎全集』第七卷、筑摩書房、日本、1980、p.361。

とを自ら明らかにしている。即ち「愛が正当に取扱われた場合」と「不正当に取扱われた場合」との違いからくる「恐ろしい隔たりを見窮めて見よう」とするのがその目的だった。これと同様なことがここでも言えると思う。つまり「クラ、の出家」でキリスト教の神聖なる面、肯定的な視点で描いた後に、キリスト教信仰の醜悪な面、否定的な視点で描こうとしたのが「奇跡の咀」だったと推測される。「奇跡の咀」では信仰深い信徒のふりをした二人の障害者が、信徒を騙してお金を掠め取る一連の成り行きが描かれているが、その視点は明かにキリスト教に対する批判である。「クラ、の出家」が9月に発表され、「奇跡の咀」が10月に発表されていること、また二つは共に『フランシス聖者伝』の一節を題材にしているという事実は示唆的である。結局、キリスト教に対する不の意識が、この作品の根底にあることは否定できない。次は、この点について具体的に検証していくことにする。

2.2. 登場人物の人物設定をめぐって

増子正一は、「奇跡の咀」がパウロ・サバティエ著『アッシジの聖フランチェスコ』の第三章「千二百九年前後の教会」をモチーフとして書かれたことを明らかにしている。¹²⁾「千二百九年前後の教会」は、キリスト教を信奉する国での実際に起きた当時の出来事を記述したものである。作品の理解のため、多少長いがその内容について記述することにする。

その時代には聖物は、呪符と少しも異なることがなかつた。それは只に何等信仰または敬虔の、特別な状態にゐない人々の上に、奇跡を顕した許りでなく、その人物如何に関らず、人々の間に大なる力を示した。Toursの聖

マルティンの遺骸が、丁抹の侵入を恐れて、ある遠い陰匿処へと、密やかに運び移されたことを、一編年史家が述べてゐる。再びそれを本国に持ち帰るやうになつたが、その時 Touraineに、おのれの疾病が却つて身の仕合せになり、乞食をして多大の金額を獲得してゐた、二人の癡疾者があつた。この聖物が持ち帰られると云ふ報知を聞いて、彼等は非常に懼れた。聖マルティンは確かに彼等を癒して、彼等の生計の資本を奪ひ去るであらう。彼等の恐怖は方しく根拠あるものであつた。彼等は逃亡を企てた。しかし、跋足のために疾く走ることが能はず、まだトゥレーヌの国境を横切らない間に、この聖徒が到着して、彼等を癒したと云ふのである。¹³⁾

こうした内容をモチーフに、独自の創意を加えて描いたのが「奇跡の咀」である。では、実際にどんな創意が加えられているのだろうか。人物設定の相違に注目し、二つを比較してみることにする。

	原作	奇跡の咀
設定場所	Tours, Touraine	デーン(デンマークおよびスウェーデンのスコーネ地方)
聖物	聖マルティンの遺骸	聖マルティン様の御尊像
侵入者	丁抹人	デーンの家賊
聖物の安置場所	遠い陰匿処	雲に隠れた山の頂

12) 増子正一、「片輪者の原点」、『有島武郎研究』、信教出版社、1994、p.720。

13) パウロ・サバティエ著(中山昌樹訳)、『アッシジの聖フランチェスコ』、洛陽堂、日本、1915、p.74

登場人物	二人の癡疾者	A：盲目で、占い師 B：跛足で、人の同情を利用してお布施を受ける 甲：未亡人、基督教信者 乙：甲の娘として新たに登場
------	--------	---

原作とは違い、登場人物はA、B、甲、乙の4人となっている。A・Bは障害者(盲目と跛足)、甲・乙は言われるままに信じ込むキリスト教信徒として描かれている。

Aの年は45歳。聖マルチンの御尊像が山に移された後に生まれ、その恩恵にあずかれずに盲目として生まれた。A自身、自分は「何か神の咀を受けた身だ」と思っている。しかし「神様は如何なるものも無益にはお造りにならない」(p.188)¹⁴⁾とし、また「達者な人の持つものを私は持っていないが、達者な人の持たないものを私は沢山待つてると気が付いて見ると、今は却て達者な人達が気の毒のやうにさへ思へます。私の肉に下つた神の咀は結局私の霊には祝福なのです。」(p.188)と、一見立派な信仰告白をする。そして、相手に自分を信じ込ませ、「御相談相手になるものといつては、盲目でこの世に何んの欲もない私位なものです」(p.190)と自分を売り込むよう努める。Aは「眼の見えないお陰で私は人情の裏表をすつかりと味はされてゐます」(p.190)「丈夫な人間達はそれぞれの欲に渴いて他人の事なんか思つてはるませんよ。さういふ時に私のやうな片輪者が役に立つのです」(p.191)と、盲目という自分の弱点を最大限に生かしつつ、立派な信仰者の振りをして、相手を完全に自分の言いなりになるように誘導していく。そして、「あなたの未来は、私の豫言にさへたよつていらつしゃれば、必ずいゝ方に向きますから。人が何んといつてももうつかり乗せられたり信じたりしてはいけませんよ。」(p.191)とうまく騙し、甲が疑いを持たな

14) これ以後、「奇跡の咀」からの引用は本文中にページ数だけを表記することにする。

いように洗脳していく。そして、甲に浄財をさせるよう導いていくのである。

Aはまさに「偽キリスト信者」「詐欺師」「いかさま屋」の代表的人物と描かれていることがわかるだろう。いかにも謙虚で人格者のように振る舞い、神に対する信仰告白をし、相手を信じ込ませる偽善者で、有島が一番忌み嫌う人物として描かれているのがわかる。

更に、Aを占者(占い師)として描いている点にも留意したい。有島は占いはじめ、そうした迷信的なものを一切信じていなかった¹⁵⁾。実は『死』を畏れぬ男にも占い師を登場させており、小説の中でそれを完全に否定し、且つ徹底的に皮肉っている¹⁶⁾。このように、Aは全く信頼の置けない、人に嫌われるべき人物として描かれているのである。

では、Bはどうか。Bは「妹御をたぶらかさうとした男を斬り殺し」た罪を負うもので、「基督の御名によつて脚のなえた哀れむべき若者」として描かれている。「どうか私を思ふ存分辱しめて下さいませ。それだけ私の罪が滅びるでも御座います。」「どうか御慈悲に私を鞭つてください。鞭の一打ちはそれだけ私の罪を軽くするかも知れませんから。」(p.194)と、自らの罪を神の前に懺悔し、救いを求める信仰深い者のように描写されてい

15) 妻の安子の様態が思わしくなかったため、知人の岩本氏に霊的治療を薦められた。「超自然能力と人間関係に關する彼女の考えは深遠なものがある。僕は深い関心を持つて聴いた。しかし僕は霊的な物は失つてしまい、自然でないものには何であれ頼ることはできない、と絶えず主張した」と書いている。有島はそういったものをいっさい信じなかったし、頼りにもしなかった。
有島武郎、「観想録」、『有島武郎全集』第十二巻、筑摩書房、日本、1982、日本、p.482

16) 『死』を畏れぬ男で、有島は占師を高島嘉右衛門として実名を挙げている。高島嘉右衛門は政府にさえ頼られた易聖として知られ、特に伊藤博文の信頼が厚かった。日露戦争の際の連合艦隊の司令長官に東郷平八郎を任命したのもこの嘉右衛門の薦めを受け入れての事だったと言われている。また、嘉右衛門は伊藤博文のハルビンでの暗殺をも予言していた。嘉右衛門を信頼していたのは伊藤博文ばかりではなかった。政府の高官も嘉右衛門を信頼し、その助言で国の重要事項を決めたりした。有島は占師の言うことを信じて政策を決める政府、何でも盲目的に信じる国民のこうした風潮に不安を感じていた。
拙稿、「有島武郎の『死』を畏れぬ男」論 一暗示された社会批判一、『韓国日本学』、2007 参照

る。そして、Bはその罪滅ぼしとして、人々から預かった捧げ物を聖マルチンが奉納されている山まで、足を引きずり登っていくことにしているのだと嘘をつく。

Bはこうして人の同情を引き、それを利用して人々から奉納品を預かり、御山に持っていくと偽って全て自分の所有物としてしまう。人々の同情を得て浄財を掠め取っているBの姿を描きつつ、それがいかにおろかな行為であるかを訴えているのである。人がBに同情し騙されて献金する行為と、教会に無条件に献金するキリスト教信者の行為とが、有島にはダブって見えている。リストや聖フランシスは財産の所有を厳禁していると信じる有島は、「今日の基督教」の不義を感じ、キリストの心を体していないことを嘆いている。このように、Bもまた偽キリスト教者として造形されているのである。

では、乙はどうか。乙は、「あなたの遊ばす豫言が皆んな中つて、この町の人達がお陰で仕合せになりましたり、殊更ら私共の母も私もこの頃貧しいながら安心して暮して参れますのも皆んなあなたの不思議なお力のため御座います。」(p.197)と語っているように、Bにまんまと騙され、何ら疑いも持とうとしない。甲もまた「さうだ富むのばかりが仕合せではない。お前の家といはず此町は感心によく私達片輪を憐んで施しをした。殊にお前達は私のやうに神様から特別の力を授かつたものを尊敬し布施する事を知つてゐた。お前の家が貧しくなつたのは、それだけ神様のお眼がねに叶つた訳だ。感謝すがいゝのだ。」(p.198) というAの言葉に対し、疑うことをしらない。甘い言葉で騙す側と、素直に言われる事を鵜呑みにする信徒側との構図は明瞭で、問題点を浮き彫りにしつつ描写されていることがわかる。

利益の為に結託し、浄財を横領していたAとBは、聖像が再び町に戻るという噂を聞き、自分達の嘘がばれてしまうことを恐れて右往左往する。

聖像が戻れば体が癒される。癒されることが喜びであるはずなのに、聖像が戻ることで嘘が露見してしまい財産を奪われることの方が彼らには悲痛なのである。こうした状況を描くことで、退廃したキリスト教を痛烈に皮肉り、批判している。それは、騙す側の悪徳行為のみならず、ただ言われたことを信じ騙される信者側の姿勢をも問題にしている。「奇跡の咀」では、有島は登場人物の口を通してキリスト教信仰の問題を提起し、それに対する持論を展開しているのである。

3. 「奇跡の咀」創作とロシア革命

有島の作品は総じて「リアルな世界」と「象徴化された世界」¹⁷⁾ という二重構造になっている場合が多い。例えば「叛逆者」という評論は、主にロダンについて書かれているが、その実「近代文明・近代国家」を批判することを意図し、アナキズム史観をそこに織り込もうとしていることがわかる¹⁸⁾。また、「凱旋」「『死』を畏れぬ男」「動かぬ時計」¹⁹⁾などの作品では、そのストーリーとは別に、自らの反戦思想を暗示的に表現しようという意図が見て取れる。このように有島の作品は、表面に表れたストーリー―意味世

17) 有島は、豊島与志雄の「小説内容論」を評して「大体の御主旨殊に(三)の御主旨には無條件的に同感します。氏は(三)の内外不分の象徴化が芸術の本質であるが故に、その渾然たる姿に於て批評は下さねばならぬと主張せられる前提として仮りに芸術の内容を具象的と暗示的とに別られたのだと承知してよければ私は無條件的に同感します。私も自分の作品が常にさうあつて欲しいと願つてゐるものですから。」と書いている。有島が暗示的(象徴化された)世界を重要に考えていたことがわかる。有島武郎、「問いに答へて」『時事新報』、1921.2.16-17、『有島武郎全集』

18) この点については栗田廣美の詳しい説明がある。栗田廣美、「有島武郎『叛逆者』と〈中世への共感〉―クロボトキン・大逆事件に関連しつつ―」、『日本文学』、1985

19) 拙稿、「有島武郎の『凱旋』論―反戦・反國家思想の表出―」日本學報第67輯、2006.5 「有島武郎の『『死』を畏れぬ男』論―暗示された社会主義―」、日本學報第73輯、2007.11 「有島武郎『動かぬ時計』の暗示的な世界―作品に託された体制批判―」、日本言語文化第18輯、2011.4 参照

界とは別に、象徴化されたシンボリックな世界が秘められている場合が多い。「奇跡の咀」にもそうした創作意図があったのではないだろうか。ここでは「奇跡の咀」が書かれた時代的背景を磁場に、作品を考察してみたいと思う。

3.1. ロシア革命の勃発

作品を理解するうえで重要なのは時代性である。1917年は周知のようにロシア革命²⁰⁾が起きた年であった。有島はロシア革命に関する内容を幾度も日記に書き留めており²¹⁾、強い関心を抱いていたことが伺われる。また、この作品が書かれた同年12月、有島は「岩野泡鳴氏に」で、こう書いている。

あなたは国家主義から離れた露西亜の現状を痛罵せられたが、その現はれ方が間違つてゐるにせよ、又無自覚な多数者の迷蒙が紛亂から紛亂を生んでゐるにせよ、大きな露西亜の人間全體の心から自覺的に又た無自覺的に進み出たあの愛の裸形の閃きを誰が驚嘆と讚嘆の眼を持たずして眺められよう。第二十世紀の歴史を最も莊嚴に彩る思想はあの面も向けかねる熾烈な溶爐の中から煉へ出されるにきまつてゐる。あなたは藝術家を以て自任して居られる。あなたにはそれが見えませんか。あなたは人類

20) 1917年3月(露歴2月)、ロマノフ家を倒し、同年11月(露歴10月)、ソビエト政権を成立させたロシアの革命。1917年3月、ブルジョア勢力を主体とする帝政が打倒されてケレンスキーの臨時政府が成立する。さらに11月レーニンの指導下ボルシェビキが蜂起してケレンスキー政権を倒し、ソビエト政権が成立して世界最初の社会主義革命となりドイツと講話を結んだ。

日本国語辞典、第十卷、小学館、1976、p.1285

有島はロシア革命を高く評価していた。

21) 有島はロシア革命についての思いを日記に記している。

「ロシア革命起こる。皇帝は退位した。太公が独裁者の称を得た。」(3月17日)p.544

「午後、丸善に行く。ロシアに関する本を二冊買ふ。」(3月22日)p.545

「ロシア革命について、朝日新聞の記者に話す。」(3月23日)p.545

「三月の思ひ出 ロシア革命。ロマノフ家の没落。」(3月31日)p.546

前掲書、「観想録」。

の運命を最も賢く導き行く哲學者を以て自任して居られる。あなたにはそれが感ぜられませんか。²²⁾ <下線：筆者>

こうした記述からもわかるように、有島はロシア革命を肯定的に捉え、且つそこに強い希望を感じていた。つまり、ロシア革命を経て、理想の国が到来することを切望していたのである。「奇跡の咀」の創作にはこうした意識が底辺にあり、一つの動機となっているのではないか。有島が「ロシア革命」をどのように認識していたのか、また、それが作品にどのように展開されているのかを検討していくことにする。

3.2. ロシア革命に対する認識

有島は、「ロシア革命起こる。ケレンスキーが追われ、レーニンの党がとつて変わった。」²³⁾と11月の思い出として「感想録」に書き記している。嘗てより社会主義の思想に関心が高かった有島であるが、では唯物思想に対してどのような認識を持っていたのだろうか。『リビングストーン伝』序でこう述べている。

それ迄の私は、家の境遇と云ひ、學校で受けた教育と云ひ、到底社会主義などを少しでも徹底的に考へて見る余裕を持つてゐなかつたのでかゝる主義や運動に関する知識は皆無だつたと云つていふ。然し私は自分の経験や基督教の与へる暗示から考へて、現代の生活には確かに何所か根本的に大きな欠陥のある事だけは臆ろげながら感じてゐたのであつた。そこに金子君がやつて来た。それから私は少し

22) 有島武郎、「岩野泡鳴氏に」、『有島武郎全集』第七卷、筑摩書房、日本、1981、p.179

23) 前掲書、「観想録」、p.564

ばかり其方面の書物も漁り其主義の人達の集會にも出席した。又唯物主義と云ふやうなものも世間が想像するやうな浅薄な所から出発してゐるものではない事を確かめる事ができた。²⁴⁾ <下線：筆者>

唯物思想がどのようにして生まれてきたのか、その点について明確な認識を持っていたことが伺われる。即ち唯物思想は「キリスト教の墮落から生まれた人間の幸福への願望の所産」だという認識である。「世間が想像するやうな浅薄な所から出発してゐるものではなく、資本主義から社会主義へと展開されていくのは必然的な流れだとの考えていた。有島の次の言葉を見てみよう。

私の若い友人の一人がプロテスタント教の道徳は資本主義の道徳だと呼んだその言葉は確かに打つべき金砧を打つてゐると私は思った。今行われてゐる基督教ならば一而して信仰ある人々はさうだと断言してゐる一私はその信徒たる事を考へ直さねばならぬと思ふやうになつた。基督は財産の所有を厳禁してをられたと私には見える。基督によく似た聖フランシスの実行しようとした所もさうであつたと私には見える。若しさうだとすると私はその方面からも私の無能と怯懦の為に一基督の信徒たる名簿から自分の名を除かねばならぬ。さう考へた。かうして、今の基督教に対する私の疑惑は段々深まつて行つた。私には悵鬱な日々が増して来た。²⁵⁾ <下線：筆者>

有島は「基督は財産の所有を厳禁してをられた」と信じ、また「基督に似た聖フランシス」も同様に財産の所有を拒否していたと認識していた。

24) 有島武郎、「第四版序言『リビングストン伝』序」、『有島武郎全集』第七卷、筑摩書房、日本、p.374

25) 前掲書、pp.375-376

その点において、有島はキリスト及びフランチェスコを敬愛していたのである。これに対し「今日の基督教会」は、キリストの理想とはかけ離れた、全く異なった世界を形成してしまっているとの認識を持っていた。即ち、有島にとって現在の社会(資本主義社会)は労働を搾取し、富を蓄積する誤まった社会であり、打倒されなければならない社会だった。

有島のこうした考え方は、けっして的外れなものではなかった。東方淑雄はマルクス主義についてこう説明している。

マルクスはニーチェが生まれて間もない1848年に『共産党宣言』を発表、現実の資本主義社会はブルジョアジーが支配していてプロレタリアートを搾取して巨額の富を私的に独占していると(キリスト教の倫理を継承してその)悪行を徹底的に批判して、その支配・搾取をうけてプロレタリアートは自由を奪われて窮乏化し日常生活でも困窮する一方なので、その貧困を克服し自由を奪回するために共産主義者を中心にしてプロレタリアート・労働者が団結をして共産主義革命をすべきだという、旧約・新約聖書の教義を継承した論理・革命論を提起とした。²⁶⁾

また、キリスト教とマルクス主義との関係について、佐藤瑠威は次のように説明している。

このヘーゲルのキリスト教的世界史観が批判された後に現れた歴史信仰には対立する二つの型がある。一つは産業革命以後の機械技術の発展とそれと結びついた資本主義経済の飛躍の発展、さらに

26) 東方淑雄、「革命理論としてのキリスト教およびマルクスとニーチェの理論」、『名古屋学院大学論集 社会科学篇』第46巻第2号(2009.10)、日本、2009、p.83

19世紀における科学技術文明の発展は人類を長きにわたって苦しめてきた病と貧困、飢餓から解放し、かつてない豊かで便利な世界を現出させていくものであり、これによって人間は生きがいのある生を享受することができるとする見方である。もう一つは唯物史観に基づくマルクス主義の見方である。(中略) 両者のうちキリスト教的世界観にとって代わる意味を持ったのはとりわけマルクス主義であった。マルクス主義は、キリスト教と同じく現実の世界の包括的体系的な認識を与えるだけでなく、現実を科学的に分析し、さらに現代を世界史的に位置づけたうえで、それが崩壊していかざるを得ないこと、そのあとに共産主義社会という理想の世界がやってくることを予言するものであった。²⁷⁾

有島は当時、マルクス主義の本質を見事に見抜いていたのだった。彼が晩年に書いた「想片」の内容を見ると、それが確認できる。

マルクスは唯物史観に立脚したと稱されているけれども、若し私の理解が誤まっていなかったならば、その唯物史観の背後には、力強い精神的な要求が潜んでいたやうに見える。彼らはその精神交渉(それを彼れはやさしいなつかしさを以つて望見している)を根底的に打崩したものは實にブルジョワ文化を醸成した資本主義の経済生活だと断言してゐる。而してかゝる経済生活を打却することによってのみ、正しい文化即ち人間の交渉が精神的に成り立ち得る世界を成就するだろうことを豫想してゐるやうに見える²⁸⁾。

有島にとってはキリスト教会の腐敗と資本主義での労働の搾取、社会矛盾は一つながりであり、それにとって代わる社会の到来、ロシア革命は大きな希望であった。こうした新たな時の到来に対する期待が、創作における一つの動機となっているのではないかと考えられる。有島は「奇跡の咀」で腐敗し墮落したキリスト教の一断面を示しつつ、それと関連(ロシア革命も腐敗したキリスト教の遺産)して自らの考えを「暗示的」に表現しようとしたのではないと思われる。

3.3. 作品に描かれた「暗示的」意味

作品中、AとBがキリスト教信者を騙してお金を奪っている様子が幾度も繰り返し描かれている。

<Aの場合>

「まあだまされると思つて私をお信じなさい。あなたの未来は、私の豫言にさへたよつていらつしゃれば、必ずいい方に向かいますから。人が何んといつてもうっかり乗せられたり信じたりしてはいけませんよ。」(p.191)

「今下さつたお金は矢張いただいておきませう。今戸口を出たら突然お告げがありました。その金は甲の心からの浄財だからそれを持つていつて貧しい者等に施してやすがいいと仰せられました。」(p.193)

「さうだ富むのばかりが仕合せではない。お前の家といはず此町は感心によく私達片輪を憐んで施しをした。殊にお前達は私のやうに神様から特別の力を授かつたものを尊敬し布施する事を知つてゐた。お前の家が貧しくなつたのは、それだけ神様のお眼がねに

27) 佐藤瑠威、「哲学とは何か—生きる意味の問題をめぐる—(1)」、別府大学紀要 第55号(2014)、p.196

28) 有島武郎、「想片」、『有島武郎全集』第九巻、筑摩書房、日本、1981、p.46

叶った訳だ。感謝すがいゝのだ。」(p.198)

<Bの場合>

「私は一年に一度づつあの御山に上つて聖マルチン様に懺悔を致すのです。毎年半分かの御同情を受けて参つてゐます。私の懺悔が通りましたら、この跋足も迄度なほると存じます。さうしたら報酬の為に身を粉にしても人の為に尽くしたい覚悟で御座います。」(p.194)

「私が毎年この足で持つて上つた金銀財宝が山のやうに積重ねられて御座います。御尊仏をお迎え申す費用はそこにある実物だけで事足る程に積重ねられて御座います。」(p.195)

増子正一は「奇跡の咀」を改稿して書かれた「片輪者」を、「摂取する資本主義を片輪者として風刺して、甘い汁は長くは吸えないという主題」だと解説している²⁹⁾。筆者もこの考えに同意するものである。作中での人を騙してお金を奪い取るA・Bは、労働者を搾取し支配する者を髣髴させている。有島はこの二人をブルジョワ階級の人々になぞらえ、特権階級者が一般市民から必要以上に利益を得ている社会的な不合理さを<暗示的>に表現しようとしている、と見て取れる。有島がロシア革命に多大な関心を持ち、そうした時期に書かれていることも、その一つの裏付けだと言えるだろう。

では、こうした考え方をもとに作品を見ていった場合、「御尊像の下山」は何を象徴していると言えるだろうか。おそらくそれは<ロシア革命>を象徴しているのだろう。「あの喜び狂う声はどうだ」(p.204)というよう

に、人は「御尊像の下山」を歓迎する。反面、A・Bはその到来を恐れ、慌てふためいている。市民は「社会革命」を歓迎するが、ブルジョワ階級者はその時の到来を恐れるといった構図がここでは見てとれる。

やがて聖マルティンの御尊像が山から下りて来ることとなり、AとBは自分達の嘘がばれることを恐れて、右往左往することになるが、その様子が次のように描かれている。

B：水を一杯下さい水を。……いえ、よう御座います。私はかうしてはみられませんか。私は一寸Aさんの所まで行つて来ます。ちょっと、デーの奴等は何をしてゐるんだ。(p.201)

A：とうとう破滅だ。俺達の運の運の尽きた。(p.202)

A：俺れや俺れのあの後家の娘から聞かされたんだ。聞かれた途端に眼が見えるようになったかと思ふ程驚いてしまった。(p.202)

では、聖像が山から降りることで、二人の障害が癒されるという設定は何を意味するのか。「体が癒される」ということは、普通の人となり、人をだます武器がなくなることを意味する。即ち、体の障害を利用してお金を騙し取り、贅沢な暮らしをしていた特権階級者が、「御尊像の下山」で、これまでのようにたやすく騙して浄財を奪えなくなることを意味している。彼らは「俺達はほんとうにどうすればいいんだ。」という不安の言葉と共に作品は幕を閉じているが、これはブルジョワ階級者達の未来に対する不安、と見ることができよう。

有島は、こうした内容を<暗示的>に表現しようと意図していたと考えられる。ロシア革命が起り、日本でも労働運動が高まりつつあった1917年10月にこの作品は書かれている。搾取する資本家を「嘘つきの詐欺師」として風刺し、いつまでも騙し続けることはできないことを象徴的に

29) 筆者はこの説に同意するすとともに、これがこの論文の一つのヒントとなっている。増子正一、「有島武郎と児童館」、『有島武郎研究』、新教出版、1994、p.676

見せている。「奇跡の咀」は、ロシア革命に刺激を受けた有島が、キリスト教の不の部分（浮き彫りにしつつ（リアルな世界）、腐敗した社会（キリスト教を基盤とした資本主義社会））が去り、新たな社会の到来を暗示する、そういう二つの意味合いが込められた作品、と見ることができよう。

4. おわりに

有島は、キリスト教からの離脱を宣言し、作家として歩き始めた人である。しかし、キリスト教と全く無縁であったわけではなく、キリストに対する敬愛と憧憬、それとはまったく正反対の嫌悪と批判を繰り返し小説あるいは評論に書き残して来た³⁰⁾。「奇跡の咀」はキリスト教を負の立場から見詰め、その矛盾を皮肉を込めて批判した作品、と見ることができる。一方、この時期に起こったロシア革命に刺激を受け、新しい時代の到来を作品の中で〈暗示的〉に表現しようとしたとも言える。すなわち、社会的動乱に便乗し、悪知恵を働かせて労働もせず人から金を搾取する二人の障害者（AとB）を描こうとしたのだった。資本主義を基盤とした帝国主義を推し進めていた当時の政府に対し批判的だった作家が、搾取を悪とみなして勧善懲悪の結末を準備したのは当然の成り行きだったと言える。ただ「奇跡の咀」はその意図するところが十分に表現されているかといえば、そうではない。大衆に訴える戯曲としては内容的に多少無理があったと言えよう。それゆえ、有島はこの題材に未練を持ち、もう一度童話「片輪者」³¹⁾として改稿し、発表したのではないかと思われる。

有島の作品では、リアルな物語世界のみならず、作品の中に託された〈暗示〉が存在し、それを読み取ることは非常に重要な作業だと言える。こうした試みは、有島の真の意図を見出し、作品の再評価に繋がると思う。本稿はその新たな試みの一つである。

30) キリスト教信仰の世界を描いた作品としては、『宣言』『迷路』『カインの末裔』『クララの出家』『石にひしがれた雑草』『或る女』『三部曲』などが挙げられる。

31) 「片輪者」は「奇跡の咀」を改稿し、1922年1月に『良婦之友』に発表された童話である。

[ABSTRACT]

Study on the Takeo Arishima's "KISEKI-NO-NOROI"

-On its creation and concept-

Okumura, Yuji(Kyungnam University)

Takeo Arishima wrote a play called "KISEKI-NO-NOROI" in October 1917 (Taisho 6). 1917 was the year when Arishima became prominent as a writer, and he has continuously presented famous works. Among them, "KISEKI-NO-NOROI" is not a work that has received a certain evaluation, so it has not been a work that has received much attention. However, in the novel written immediately after "Clara-no-Syukke", the passage of Sabatier's "St. Francesco of Assisi" is the motif of creation. It was also written in the midst of the Russian Revolution, so I considered it to be the subject of research.

The play criticizes Christianity and expresses the negative aspects of Christianity through four people. Arishima's works often have a dual structure of "real world" and "symbolized world", and this work also has a symbolized world apart from the meaning world that appears on the surface. You can see that "KISEKI-NO-NOROI" was written immediately after the Russian Revolution, and Arishima, who was highly interested in the Russian Revolution, drew his idea symbolically. That is, comparing the two statues of the disabled with the bourgeois class, comparing the disabled with the proletarian class, comparing "the holy statue descends from the mountain" with the Russian Revolution. Arishima, who had hope

for the arrival of a new era, tried to express it in play.

Keyword : Christian, St. Francesco, Sabatier, Russian Revolution, Historical View of Materialism

[参考文献]

□ 基本資料

有島武郎, 『有島武郎全集』, 筑摩書房, 日本, 1982-1988.

□ 単行本

有島武郎研究会, 『有島武郎辞典』, 勉誠出版, 日本, 2010.

パウロ・サバティエ著(中山昌樹訳), 『アッシジの聖フランチェスコ』, 洛陽堂, 日本, 1915.

□ 論文 その他の資料

日本国語大辞典, 第十卷, 小学館, 1976.

片岡良一, 「『一房の葡萄』と『片輪者』」, 『有島武郎と夏目漱石』, 学友社, 日本, 1947.

増子正一, 「片輪者の原点」, 『有島武郎研究』, 信教出版社, 日本, 1994.

増子正一, 「有島武郎と児童館」, 『有島武郎研究』, 新教出版, 日本, 1994.

佐藤瑠威, 「哲学とは何か—生きる意味の問題をめぐって—(1)」, 別府大学紀要 第55号, 日本, 2014.

접수일 : 2019. 07. 29 총평일 : 2019. 08. 15 게재확정일 : 2019. 08. 21